中のものとは少し異れり、葉に長みなく鋸齒深く、葉莖短くして枝梢に紅色を帶、鷄冠木に彷彿たり、尤地錦抄に載るところの圖は、葉莖短く葉にはゞあり、若木の時は玄かるものならん、實生などの小木は、僅に五分に滿ざる葉も生じ、又若木のいきほひよき枝には、三寸にあまる葉あり、大葉と小葉のものは、同木とは見えざるものなり、小樹は殊によくそむ、地錦抄にいふごとく、色色に染なして美觀なるものなり、佐藤成裕曰、唐かへでは、本邦にも自生のものあり、丹波邊の山中には大木ありといへり、又大和本草に小カヘデといふものあり、其葉形唐かへでに似たり、是和產の者をいふなるべし、又西遊記續篇に、霧島山の奥に入し時、種々の奇樹異草數々見し中に、唐楓に甚よく似たるものを見し事をいへり、花彙にはこの唐かへでを以、眞の楓樹とせしは非なり、唐かへでは、物理小識云、箕峯有楓、開兩岐紅花、其葉莖亦紅といへるもの、卽唐カヘデなるべシ、楓といへば、其葉三尖なる事は知べし、實の毬をなさゞるをもつてかくいひしならん、實を花といひしは誤なり、

〔西遊記續編五〕楓樹

唐土の楓の事は、過し年唐土へ仰遣されて三本渡れりとぞ、其中一本は枯て、今日本に唯貳本のみ有りとなり、余〇橘南谿も其樹の葉とて見し事のありけるが、大さ拳の如く、三ツ又にて殊に厚し、實は楓球とて栗のいがに似たり、秋ふかくなれば其葉黃色に變せり、日本の紅葉とは大に異なり、日本のごとく艶美なるものにはあらず、又頃日我友關谷氏、長崎の御藥園の楓樹の種なりとて、二本需得携へ登りて、余が家園に植しに、葉の形は三ツまたにて、初のものに似たれど、其木の小き故にや、葉薄くして小さく、唯三つ股といふばかりなり、此國の紅葉に甚だ相似たり、其實をとへば、此國のごとく蜻蜓の小なるがごとしといふ、されば球にはあらず、たゞ此國の紅葉と同類異種といふべし、されど關谷氏が携へ登りしも、唐土より將來の木に違ふ事は非ず、是を以て